第四講　演習問題(4)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

きさらぎ十日ばかり、※越（こし）の前（さき）の国板取（いたとり）といふあたりを旅行しけるに、雪いと高し。「この雪いかばかりの高さは侍る」と問ふに、「※十丈（とたけ）あまりなり」といふ。(a)いかにしてさは量（はか）りしれりとおもふに、常見る大木（おほき）の末（うれ）が、真柴（ましば）などみるばかりに、雪のつもれるうへに余りて侍るをもて、そればかりの丈（たけ）なりとはいふなり。

雪はおもしろき物にて、松の小枝（さえだ）にかかりたるあかつき、小竹群（しののめ）のうら葉にふりしく夕ぐれなどは、花にもまさりておもほゆるを、かくつもりたる山路（やまぢ）にては、人の命（いのち）をもとるべきものは雪なり。かまへてきさらぎばかりは、春のきざし下にめぐみて、かのつもれる雪は氷りながら土をかいはなれてくえおつる。これを雪国には雪なだりといふなり。さる時は麓（ふもと）の※家村（いへむら）をうもらし、柱梁（はしらうつばり）などをさへうちたふし、あまたの人、これにうたれて死ぬること、年々にあ①なりといふ。

さる(b)かしこき事をききしる人は、Iやどりをばまだきに出て、氷の消ゆまじき時にあゆみ、日のさしのぼりてあたたけ

くなれば、さる高山の※常陰(とかげ)なら②ぬ所をもとめて、昼より先(まづ)やどりを乞ふなり。またさるやどりをこふにも、大路(おほぢ)の雪は軒(のき)よりも高ければ、遥(はる)かに人屋を見下(おろ)して大声(おほごゑ)を出し、「やどりせ③む。借(か)し給へ」といへば、Ⅱ黄泉(よもつ)下べより打ちあふぎて、「道の伴(ともな)ひはいくたりにてさぶらふ」などいふを、「見給ふばかりの伴ひなり。借代(かりで)はいくら参らすべき」と、又大声にいへば、「かかる雪の中の住居して侍るに、(c)何まゐらせむものもなし。よきほどにしたまへ」といふさへかすかに聞こゆ。さて谷の底(そこ)にはひ下るばかりに家(いへ)の外(と)に下りて、先火(まづひ)を乞ふにぞ、真柴(ましば)はぬれにぬれて火つかず。烟(けぶり)は立ちこめて、いぶせき事いふかぎりなし。

さて、※落間(おちま)のすみに雁(かり)を三つと真鴨(まがも)を二つなむ、※かたまにふせてかひおけり。「こはかかる旅人(たびびと)にたうべさせむかまへ④にや」といへば、「Ⅲさることにはあらず。彼(かれ)らはよく時をしりてはべる鳥なれども、西南(にしみなみ)の国のはやく春づきし年は、時をたがへて、まだきに北国(きたぐに)をさしてかへり来る故に、翼(つばさ)ありて空はゆけども、さすがに※八重(やへ)山の雪のみを見つつ飛びこゆるに、とく下(お)りて物はまむとすれども、野も岡(をか)も川もひた白にて、何はまむ所もなければ、飛びかへらむとしつつ、空にいざよふ時、かの雪国にはべる雪吹(ふぶき)といふあらしの吹出(ふきいで)て侍るに、天路(あまぢ)まどひて、少しも人家(ひとや)のちかからむ所にとびくだりて

やすらふなり。日頃(ひごろ)は人をおそれて高く飛鳥(とぶとり)なれども、さるときは其人(そのひと)をおもひ頼みて、かくちかづくがかなしく侍り。これも十日ばかり先(さき)のあらしに、我家(わぎへ)の外(と)にくだり⑤にけり。この隣(となり)にも、先の家にも、三四五(みついつ)つは落ちて侍るを、みな我ごとくにして、稲をはませてかひてさむらふ。(d)やうやうのどけくならば、隣なるも先のも、これなるも、ともにして放(はなち)やらむと申しあはせてさむらふ」とかたる。Ⅳよき心かなとはおぼえける。

（建部綾足『折々草』より）

※注

越の前の国板取＝現在の福井県南条郡南越前町板取。

十丈あまり＝三〇メートル余り。板取近辺は豪雪地帯。

家村＝家群。集落の意。

常陰＝いつも日陰になっていて日の当たらない所。

落間＝土間。

かたま＝竹籠。

八重山＝幾重にも重なり合った山々。

問一　波線部（a）〜（d）を現代語に訳しなさい。

（a）＝

（b）＝

（c）＝

（d）＝

問二　傍線部①〜⑤の助動詞の意味を次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

A　完了　　B　伝聞　　C　意志
D　断定　　E　尊敬　　F　打消

①＝　　②＝　　③＝
④＝　　⑤＝

問三　傍線部Ⅰについて、そのようにする理由を簡潔に述べなさい。

問四　傍線部Ⅱについて、何が、どのような状態であることを「黄泉(よもつ)下べ」に喩(たと)えているのか。簡潔に説明しなさい。

問五　傍線部Ⅲはどういうことか。「さること」の内容を明らかにして、三〇字以内で説明しなさい（句読点も字数に含める）。

問六　傍線部Ⅳについて、なぜこのように思ったのか。本文の内容に即して六〇字以内で説明しなさい（句読点も字数に含める）。

第四講

〈模範解答〉

問一　（a）どのようにして雪の高さを測って知ったのか
（b）雪崩の恐ろしさを聞き知っている人
（c）何も差し上げる食べ物もない
（d）次第に天候が穏やかになったら

問二　①　B　②　F　③　C　④　D　⑤　A

問三　日が昇り暖かくなると雪崩発生の可能性があり、雪崩に巻き込まれないようにするため

問四　家が、高く積もっている雪の上から見ると、はるか下にある状態。

問五　雁や真鴨を旅人に供するために飼っているのではないということ。（三〇字）

問六　吹雪で困っている鳥をみんなで助け、春になれば、その鳥を一緒に放そうとしている雪国に住む人々の優しさに感動したから。（五十七字）

〈現代語訳〉

二月十日頃、越前の国板取という辺りを旅していたところ、雪がとても高く降り積もっている。「この雪はどれくらいの高さがありますか」と問うと、「三〇メートル余りだ」と言う。どのようにしてそれを測って知ったのかと思うが、いつも見ている大木の梢が、小枝などを見るくらいに、雪の積もった上に出ていますことによって、それくらいの高さだと言うのである。雪はおもしろいもので、松の小枝に降りかかっている暁や、小竹群の枝の先端の葉に降りしきる夕暮れなどは、花（の美しさ）にも勝っているように思われるが、このように降り積もった山道では、人の命も取ることができるのは雪である。心すべきは二月頃は、春の兆しが（雪の）下で萌して、この積もった雪は凍ったまま土を離れて崩れ落ちる。これを雪国では雪崩という

のである。そういう時は麓の家群を埋もれさせ、柱や（柱の上に渡している）梁などまでも打ち倒し、大勢の人が、これに打たれて死ぬことが、毎年あるそうだという。

そのような（雪崩の）恐ろしさを聞き知っている人は、家を早くに出て、氷が消えないうちに歩き、日が昇って暖かくなると、しかるべき高い山のいつも日陰になっていて日の当たらない所ではない所を求めて、昼間からまず宿を乞うのである。またそのような宿を乞うときも、大通りの雪は軒よりも高いので、はるかに家を見下ろして大声を出し、「宿を借りたい。お貸しください」と言うと、冥界のような地底から仰いで、「道のお連れは何人ですか」など言うので、「ご覧になるだけの連れです。宿泊代はいくら差し上げたらよいか」と、また大声で言うと、「このような雪の中の住まいですから、何も差し上げる食べ物もない。よしなにしてください」と言うのまでもかすかに聞こえる。そうして谷底に這って下るように家の外に下りて、まず火をお願いすると、（焚き付け用の）小枝は濡れていて火がつかない。煙が立ち込めて、不快なことこの上ない。

さて、土間の隅に雁を三羽と真鴨を二羽、竹籠を伏せて飼っている。「これはこのような旅人に食べさせようとして備えたものですか」と言うと、「そういうことではない。これらはよく季節を知っております鳥ですが、西南の国が早く春になった年は、季節を間違えて、早くに北国を目指して帰って来るので、翼があって空を飛ぶけれど、そうはいってもやはり幾重にも重なり合った山々の雪ばかりを見続けて飛んで越えてくるので、すぐに下りて何かを食べようとするけれど、野も丘も川も真っ白で、何も食べるところもないので、飛んで帰ろうとしては、空をただよっている時、例の雪国にございます吹雪という嵐が吹き出しまして、空の道の方向を失って、少しでも人家の近くに飛び下って休むのです。日ごろは人を畏れて高く飛ぶ鳥であるが、そういう時は人を頼りに思って、このように近づくのが愛しいのです。この鳥も十日ほど前の嵐の時に、我が家の外に下りてきた。この隣にも、前の家にも、三、四、五羽は落ちてきましたのを、みな私のようにして、稲を食べさせて飼っています。次第に天候が穏やかになったら、隣でも前の家も、私のところでも、ともに放してやろうと申し合わせています」と語る。よい心だなあと思った。